

東京喰種 一人の境界
線

のりちゃん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある喰種の記憶を持っている捜査官とその鍵を握る喰種の神父が共存する…真実に辿り着く頃には――

目次

第3話	第2話	第1話
10	5	1

第1話

—21区の路地裏—

「ひ、ひいッ……！」

俺は走った。必死に、腕を大きく振って。

「オイオイ逃げてんじゃねエよオ!!」

後ろから迫り来るのはターゲットの喰種。俺が逃げられる訳が無い。無力な俺なんか……

▽

俺は運動神経音痴で頭も悪く何も取得が無いただの三等捜査官。10区担当だけど、あまりにも役立たず過ぎて21区の手伝いに回されちまった。今は上司に着いてきて任務遂行中だ。後を付いているとふと、上司が振り向いた。

「俺はあつちを見てくる。お前は此処で待機だ。」

「了解です。」

そのまま俺は上司の命令に従いその場で待機していた。ところが……上司の姿が見えなくなった瞬間、その出来事は起きた。

「よオ、テメエは…神田智徳か？」

目の前に現れたのは資料で見た今回のターゲット”双頭黒成”だった。俺はクインケを展開しては直ぐに相手に斬り掛かる…が肩を抉られたと同時にクインケも弾き飛ばされる。俺じゃ到底敵わない、と確信した俺は情けないが相手を後にして逃げた。

そして…今に至る。俺は逃げ続けていたが、もはや行き止まり。目の前には壁、後ろにはターゲット…逃げ道なんてなかった。

『××。本当にこの子なの？君の狙いは』

「ああ、コイツだ…ツたく、手間掛けさせんなよ。」

相手は一人の筈なのに、まるで誰かと会話している様に一人でぶつぶつと呟いている。俺は抵抗出来ずに相手に背を向け怯えるだけで精一杯だった。そんな俺に喰種が嘲笑っているかの様な声質でこう告げてくる。

「ハッ、無様で間拔けなノリト君…そんなテメエには俺様が力を貸してやるよ。良かったなア？俺様と同じ名前です…、殺されなくてよオ」

「…う…それってどうい…どう」

相手の言っていることがさっぱり分からなかった。それに何故俺の名前を知っているのかも。痛みで思考もままならない俺は相手から鳩尾に強烈なワンパンをくらえば

一瞬で意識を失ってしまった。

.....

ゴーン……ゴーン……

「……ん？」

俺様は鐘の音で目を覚ました。此処は教会、俺は此処に住んでるから俺の家でいいのか……まあ、居眠りでもしちまつたんだろう。

それにしても随分と昔の夢を見た……そういえば俺様が変わったのはあの時からだった。あの”俺様”と言つてた奴は一体……。

『おはようお兄ちゃん……随分とぐっすりでしたね。仕事続きで疲れが溜まつてたの？』
考え込んでいた時にふふ、と微笑み乍声掛けてきたのは俺様の弟。歳は17歳、深紅のロングの髪を後ろに結んでる……ま、本当の兄弟じゃねえんだけど。此奴は此処の神父であり俺様の同居人でもあるな。

「ああ、疲れてた。つか俺様どんくらい寝てた？」

『ええと、帰つてきて直ぐに倒れるように寝てたので……12時間くらいは寝ていたよな』

俺様がいつも寝てる睡眠時間に二倍した時間帯を聞けば少し吃驚して慌てて時計を見てみた……ヤベエ、10時、遅刻じゃねえか。

『…その、起こさなくてごめんなさい。お兄ちゃんにゆつくり休んでもらいたくて…遅刻ですが、ちゃんと連絡はしておきましたので。朝ご飯はちゃんと食べて行くんですよっ。』

「あー、へいへい。」

俺様はリビングに行き、朝食が並べられてあるテーブル席へと座り食事を済ませた。

第2話

—CCCG局内—

「はア……」

俺様は飯食った後、あの世話焼き過ぎるクソ神父に車で送って貰ったが車内では、散々と無理はしないでくださいね！だとか色々と言い纏われていた。それをずっと聞き流しては此処に着いたわけだ。仕事する前にもう疲れたぜ。

そしてくだくだと仕事場へ向かっていると後ろから声が聞こえたと思えば一瞬にして俺様はぶつ倒れた。そう……アイツが突撃してきた。

「智先輩ツ！遅いです、私凄く待ち侘びましたあ。……ていうか智先輩が遅刻なんて珍しい！」

「朝から煩エなア……つか退けやがれエ」

「今は昼ですよ〜！」

「退けろつつてんだろ、聞けや!!」

威勢よく俺様の上に乗っかってんのは 桜坂姫織《サクラザカヒオリ》二等捜査官。目が死んでる血が大好きな18歳のJK。俺様の班に所属してる部下の一人。俺様の

には普通に高校生活を送ってもらいたかったもんだな。まあ、本人が好きでやってるから俺様は口出ししねエけどな。

「こらー、桜坂二等捜査官はん。退けなさい。神田特等が困つとるがな。」

「片桐先輩!?!:はい、退けますッ(♡)」

「…大丈夫でつか? 神田特等。」

「おう、さんきゅ。蒼真クン」

蒼真が来た途端デレッツデレになった姫織が退けば後から来たもう1人に手を差し出され、その手を掴み起き上がった。

俺様に手を差し伸べたのは 片桐蒼真《カタギリソウマ》一等捜査官。元キジマ班だったがキジマ准特等が死んでからは俺様の班に配属された。昔、喰種に虐殺されそうになったが一命を取り留めたらしい。キジマ准特等の様に継ぎ接ぎがあり人工四肢。今掴んでいるその義手はそれを物語る様な冷たさを感じる。…まあ、可哀想なんて言ったらあれだがコイツはサイコパスだしな、同情なんて要らねえか。

「ほんで早速来よったとこでえ悪いですけど、帝准特が呼んでえます。今日は遅刻ってあつてん…ごっつつい怖い顔してました。」

「確かに、凄いと怒ってましたあゝ! 黒いオーラむんむんで」

「マジかア…めんどくせエな、オイ」

「まあまあ、物は試しと言います。行きましょ〜！」

「それは物は試し　とは言わねエ／＼て言わへん」

「てへっ」

三人でその場を笑い済ませ、俺ら神田班の仕事場へと向かった。

扉の前に辿り着いた。何故か二人が俺様の後ろにくつついて離れない。それほど説教が嫌か……まあ、俺様は何とも無えからそのまま扉を開け普通に入った。

「はよ〜……」

ダアンツ!!　俺が入った途端にデスクを叩く音が室内に響く。

「遅い……貴様、今何時だと思ってる?」

「何時……ッて、時計見りや分かるだろ。つかあのクソ野郎が電話入れたろーが」

「口答えはいい……来い」

「だーかーらクソ」「いいから来い」

この口煩いのは帝京臥《ミカドキョウガ》准特等捜査官。短気で潔癖症の30歳。顔は綺麗だけど性格が残念なんだよなあ。あと、我らのオカンド。

そこで、俺様はしぶしぶと呼ばれたアイツの元へと近寄った瞬間。頬を思いつきり打たれた。

「痛ツてーなア…暴力反対」

「黙れ、お前はこれくらいししないとまたやらかすだろう。次は気を付けろ」

「チツ…分ーツたよ」

イラついた俺は相手が最も嫌うボディタッチ、相手の頭をポンツと軽く叩けば席に座った。

そんな京チャンは頭に手をやれば汚いを連呼して自分の頭をほろついていた。ザマアねえな、と俺様は嘲笑つてやった。

「うるさ…あの、静かに出来ないんすか？」

「あ？」

「静かに出来ないんすか？…って聞きました。耳大丈夫なんすかね」

双眸を細めこつちを見てくるコイツは周防獅王《スオウ レオ》一等捜査官。上司嫌いでクソ生意気な18歳。クソみてえに馬鹿なのにクソみてえにゲームメイクが得意。気に食わねえ。

「…それが上司に向かって物言う態度か？」

カチン来たのか短気な京チャンは獅王のデスクの目の前に立ち塞がった。それを見た獅王は反論するように立ち上がり。

「別に上司嫌いじゃなくて、アンタらを上司だと思ってないだけですから」

「……貴様あ」

不穏な空気が流れ今にも喧嘩しそうな時、室内の扉が開いて五人ほどの影が見えた。

第3話

「喧嘩しちや駄目だよお、仲良くしないと〜」

入ってきて早々、五人の内のご真ん中に立っている銀髪で身長が2 m以上の巨人が声を掛けてきた。ゆったりとした口調が特徴だが俺様的にはいけ好かない。コイツは白夜炎士《ビヤクヤ エンジ》特等捜査官。

此方へ近付いてきたと思えば京チャンと獅王の手を取りお互いに握り合わせ微笑む。

「はい、仲直り〜」

「ひっ…」

潔癖症の京チャンは直ぐに手を引つ込め自分の手を摩る。獅王は苛立つように席へと乱暴に腰掛ける。その様子を見た炎士はキョトンとして俺様の方に寄ってきた。

「ねえねえ、智徳。何で二人は仲直りした筈なのに怒ってるの?」

「あ、テメエがKYだからだろ。……つか何か用か?」

先程の件が無かったかのように待つてました、と言わんばかりに笑顔で

「えつとねえ、今度の任務で僕達一緒に組むことになったよお。僕待ちきれなくてね、メンバーと一緒に教えに来ちゃったあ」

ぴよんぴよんと跳ねては俺様の首に手を回し抱き着く。子供か、とツツコミたくなつたが言葉が続けようとした時、立っていた内の一人の銀髪の女か男か見た目だけじゃかんねえコイツの妹　白夜氷麗《ビヤクヤ　ツララ》が割入る。

「お兄様、神田特等のご迷惑になっていきますよ。すみません…いつもいつも」

「大丈夫だ。もう慣れた…つか何で一緒に組むことになってんだよ、上からの命令か？俺様聞いてねえんだけど…」

途端にデスクにどっさり資料が置かれる、側には蒼真が目の笑っていない笑みを浮かべて俺様を見てた。

「はいこれ、今週の資料ですー。班長は部下にみな任せつきりやから予定もなあんも言われなきや分かりまへんな？その任務についても書かれてるさかい…：ちゃんと読んでくださいいね」

「…ういっす」

くすくす、と笑い声が聞こえたと思えば炎士がにこやかに笑っていた。すげえ嫌らしい笑みに見える。

「駄目だよ智徳、任せつきりはあ。ちゃんと読んでおいてよ。それじゃ、また会おうね」

手をぶんぶん振っては巨体なくせにトテトテと子供の様に班員達と共に去っていく

た。一息付くもデスクの資料を読もうと手を伸ばせばその資料は無く、蒼真の腕の中に。

「ワイが予め読んでおうたさかい纏めて話させてもらいますわ。：来週、オークションに潜入捜査します。場所は前もって他の班の人が調査してて把握済やさかいそこら辺は安心しといてください。」

ですけどちゃんと読め、と言うように結局押し付けるように渡してきた。俺様は生返事すれば改めて資料に目を通した。

目を通してから、デスクワークをこなしていればあつという間に帰宅時間。俺様は時間につつかちだから班員に残業はさせねえ、皆を帰らせれば俺様も帰ろうと局を出た。歩いて帰ろうとすれば黒いワゴン車が目の前に止まり。窓が開けば京チャンとその他メンバーが顔を覗かせ。

「智先輩！乗って行ってくださいあい」

「ンでお前ら…あ、そういや同居してんだっけか」

「チツ、乗るのか乗らないのかはつきりしろ。置いてかれてえのか」

「あー、乗る乗る頼むわオカン」

誰がオカんだ！と運転席から聞こえるが構わずに助手席に乗り込んだ。